

The Innocents Abroad の語り手

木村仁美

序

1867年、マーク・トウェインは Quaker City 号によるヨーロッパから中近東をめぐる観光旅行団に参加した。旅先からサンフランシスコ『デイリー・アルタ・カリフォルニア』(San Francisco *Daily Alta California*) とニューヨーク『トリビューン』(New York *Tribune*) に送られた通信文は、改訂を重ね1869年に *The Innocents Abroad* として出版される。通信文では、トウェインは、東部の読者も加わることを意識して、言葉使い、表現にかなりの神経を使って書いていた。それに加えて、本の体裁にするときには、旧世界の土地の風物、人、生活について、俗語の使用、猥雑な観察、聖書を茶化す冒瀆的発言を大幅に削除し、さらには、57章以後の章は、全て新しく書き足している。

一番大きな改訂と言えば、通信文ではしばしば登場していたブラウンが消されてしまったことである。ブラウンは、『ハワイ諸島通信』*Letters from Hawaii* (1866) でもたびたび登場し、思ったことを遠慮なしに言う人物である。ブラウンは消されてしまったが、彼の多弁で言いにくいこともあっさり言っただけの特質は *The Innocents Abroad* では語り手の「わたし」に受け継がれた。したがって、「わたし」は、語り手らしい特質に加えて、辛らつなことでも思ったことを自由に発言する性質を持ち合わせることになる。これは、*The Innocents Abroad* において、語り手である「わたし」が、作者から独立し、一個の人格として様々な特徴を有する登場人物となったことを意味している¹。このような「わたし」の存在は、トウェインがのちにハック・フィンやハン

ク・モーガンのような一人称の語り手を生み出す素地となっていると考えられる。

ところが、作者から独立し、一個の人格を備える「わたし」は、*The Innocents Abroad* よりもっと以前の、トウェインがネヴァダの新聞に書いていた頃の記事に、すでに存在している。*Early Tales & Sketches* に収められた1863年代のスケッチのいくつかでトウェインは、語り手の「わたし」に、同業者 Clement T. Rice を Unreliable と呼ばせて、あらゆる批判を試みさせた。「わたし」の Unreliable を批判する描写から見えてくるのは、Unreliable に負けず劣らず無知で、くだらないことにこだわりを持つ「わたし」の姿である。この「わたし」は確かに複雑な個性を持った人物であり、明らかに作者の揶揄と皮肉の対象となっている。*The Innocents Abroad* は西部と東部の新聞に送られた通信文が改訂され出来上がった作品ではあるが、その語り手である「わたし」という人物はジャーナリスト時代のトウェインのスケッチの中で生まれつつあった「わたし」の成長した姿だと言えるだろう。

本稿では、まず、*ETS* に収録された“Letter from Mark Twain” (1863) のスケッチを分析して、語り手の「わたし」はどのような特徴を持っていたのかを考察する。そして、*The Innocents Abroad* になると、作者から十分に距離を置いて一個人となった「わたし」の語りは、*ETS* の「わたし」とどこが異なるのか、そして作者の意図することは何かについて考察したい。

1.

1863年の5月、ネヴァダのヴァージニアシティ『テリトリアル・エンタプライズ』(*Virginia City Territorial Enterprise*) で記者をしていたマーク・トウェインは、編集者 (local editor) の地位を一時退いて、Clement T. Rice とサンフランシスコへ二ヶ月の旅に出かけている。Clement T. Rice は、当時、トウェインと宿敵を装って見せかけの口論合戦をしていた記者仲間である。トウェインは、彼を紙面上で Unreliable と呼び、粗野で、卑俗な人物に仕立て上げた。Rice もこのゲームに協力的で、悪役イメージを維持するよう努め

ている。(ETS 1:193)

この新聞の主な読者は、辺境の鉱山町にいる労働者たちである。記事の書き手も読者もお互いをよく知っている地において、二人が言いがかりをつけて批判しあう記事は好評であった。この二人が、二ヶ月もいっしょに旅をするのであるから、そこから届く通信記事に読者は期待し、またその内容を予測することは楽しみの一つであっただろう。5月19日から21日の間に、*Virginia City Territorial Enterprise* に掲載された“Letter from Mark Twain”で、トウェインがどのように Unreliable の粗野な振る舞いを語り手の「わたし」に描かせているのかを見てみよう。

「わたし」は、開口一番、Unreliable があまりに無責任で不道德な行動をとるので、いっしょにサンフランシスコに来たことの後悔を編集者に書き送っている。例えば、まず「わたし」は、Unreliable がホテルの従業員にとっては「全くの悪夢」(perfect nightmare) だと言っている。彼は最上階にあるよい部屋を与えられて気分よくしていたが、そこへ行くには螺旋階段を上る必要があり、真夜中、酔っ払ってしまおうとそこまで上がれない。おまけに目をまわして泡を吹くと、二階の空いている部屋に勝手にころがりこむ。彼は自らの非は柵に挙げて、ホテルの従業員が二階の部屋へ移るよう命令をしたのだと言って事の真相を塗り替える。そしてこうした従業員の態度は自分に対する侮辱で、訴えてやると騒ぎだす始末だ。「わたし」は、Unreliable の方こそホテルを詐欺呼ばわりして侮辱するのには我慢ができないと言う。

次に、Unreliable には、節度がないと「わたし」は言う。彼は、「わたし」に Bella Union Melodeon という「格調高い舞台」をいっしょに見に行くべきだと熱心に誘ってくる。格調高いと聞いて幾らか安心し、ついて行くと、足を全部見せて踊る女性たちがステージいっぱいに登場する。さらに Unreliable は、一般席の入場料を払っただけで、「わたし」に見張りをさせると、どんどん座席をまたいで進み、ボックス席にまで侵入する。Bella Union Melodeon は、もともとサンフランシスコで有名なギャンブル場であった。1856年から音楽ホールとなるが決して、常に「上品で格調高い」(chaste and high-toned)

演目だったわけではない。トウェインが、それを知らないはずはないが、語り手の「わたし」は、すっかり Unreliable に騙されている。このことは、すでに「わたし」が一人の登場人物として、作者とは切り離されていることを意味している。したがって、作者は、Unreliable 一人を悪者にして、語り手の「わたし」には被害を受けたと主張させることができる。ここまで見ると、語り手の「わたし」は、Unreliable と同様サンフランシスコの都会においては全くの無知で田舎者という部分があるけれど、その人柄は Unreliable とは正反対の、まじめで健全な新聞記者という印象を読者に与えている。

ところが、この「イノセント」な「わたし」が、Unreliable と同様に「信用のおけない」人物だと読者に分る部分がある。最後に「わたし」が Unreliable とかわすやりとりの場面で「わたし」は、天気について何か気の利いた表現で記事を書こうとしている。そこへ Unreliable がやって来て、いきなり「わたし」に向かってまくしたる。

“Say it’s bully, you tallow-brained idiot! that’s enough; anybody can understand that; don’t write any of those infernal, sick platitudes about sweet flowers, and joyous butterflies, and worms and things, for people to read before breakfast. You make a fool of yourself that way; everybody gets disgusted with you; stuff! be a man or a mouse, can’t you?” (ETS 1:253)

Carson City で使っていた土地の言葉で、教養の程度が知れることも気にせず、Unreliable は思うままの悪態をついたので、「わたし」の「上品な感情」(refined emotion) はすっかりぶちこわされてしまう。「わたし」は、あっという間に「詩的な」(glowing and poetical) 気分を壊されたので、「こんなうぬぼれたやつ」(this conceited ass) から逃れるためには、さっさと「この場を立ち去らなければならない」と言う憤慨のことばで筆をとめている。

しかし、ここで読者は、「わたし」が「かぐわしい花」や「陽気な蝶」といった月並みの決まり文句を好む人物であったことに気づかされる。作者トウェイン自身は、こうしたセンチメンタルで「お上品な」文章をまじめに書

くことはしない。ということは、ここでは、作者と「わたし」の間には距離があることが明らかであり、作者は、「わたし」が Unreliable を非難するのと同じように、「わたし」のお上品な性質をからかっていることが読み取れる。このように考えると、先に、Bella Union Melodeon が「格調高い」所だという Unreliable の説明を真に受けた「わたし」は悲惨な目にあったと言っているのだが、どこまで信用できるかわからない。お上品であることに気を配る「わたし」の性質から考えれば、間違っても粗野な Unreliable とともに歓楽街で遊んでいたとは言わないはずだ。したがって、“Letter from Mark Twain” は、語り手の「わたし」が Unreliable を笑いものにすることを目的としたスケッチのようでありながら、同時に、「わたし」の口先ばかりで「信用のおけない」部分を作者が笑いものにしていくことが明らかになる。これは、トウエインが、早い時期から「わたし」という語り手を、一個の個性ある人物に仕立てあげようと奮闘していた証拠である。

このように、語り手の「わたし」は、ETS のスケッチにおいてすでに作者とは独立した人物となっている。では、*The Innocents Abroad* の「わたし」は、さらに ETS から発展して、どのような人格を備えることになったのだろうか。「わたし」が異国の地で繰り広げる観察を通して考えたい。

2.

The Innocents Abroad の語り手の「わたし」は、“Letter from Mark Twain” の語り手と同様、「イノセント」な視点を持ち合わせているが、“Letter from Mark Twain” の語り手のように、物事を型にはめて見ようとすることはしない。むしろ、「わたし」は、「イノセント」な視点によって、物事についての既成概念を次から次へと崩していく。例えば、ミラノに来た「わたし」は Leonardo da Vinci の “The Last Supper” を見ると、それを年月を経てくすみ、傷つき、美しさに欠けてしまった “the mournful wreck of the most celebrated painting” (190) と呼んでいる。この汚れて色褪せた傑作は世界中の人々から賞賛されているが、「わたし」には、そうした人々の賞賛が、例えば、“some

decayed, blind, toothless, pock-marked Cleopatra” (192) を見て、“What matchless beauty! What soul! What expression!” と叫んでいるに等しいと思える。作者は、「わたし」に“The Last Supper”の芸術的価値について論じさせる意図はない。芸術的価値について疑問を抱く「わたし」は、すでに、“The Last Supper”に関する本をひもといて、それを傑出した絵画であることを確信している。しかし、傑出していると思えるのは三百年前の“The Last Supper”であり、現在の汚れてしまった作品が当時と同じように傑出しているのかは疑わしいと思う。「わたし」は、自分の眼が“inexperienced eyes” (191) であると謙遜しているが、“The Last Supper”についての知識を得た上で、原画よりも複製の方がはるかに立派だと公言する。このことは、傑作と言われるから賞賛のことばを大げさに口にする、右にならえの人々への「わたし」の皮肉であるとともに、“The Last Supper”の歴史的背景を学んだ後でもなお、複製の方が立派だと言ってこだわる「イノセント」ゆえの「わたし」の発言²を、作者が笑った二重の意味を含んでいることが見てとれる。

また、物事の既成概念を崩していく「イノセント」な視点は、「わたし」の実際的な面をさらけ出してしまう一方で、旧世界の社会にはびこる矛盾を言い当て、さらにはそれを糾弾する結果になることもしばしば起こる。これは Unreliable が、「わたし」のセンチメンタルな記事をくだらないと罵倒したことで、彼の卑俗さばかりでなく「わたし」に信用性がないことまで明るみになった展開と同じである。同じくイタリアの地はフィレンチェで、「わたし」は、財政力のないイタリア政府がなぜ美しい街道を維持できるのか理解しがたいことだ、と皮肉を込めた言及をしている。1861年、独立国になったイタリア政府の国庫は一日で破綻したため、教会領を没収した。政府は「没収」(confiscate) とは呼んでいないと「わたし」は皮肉るが、没収であったのは明らかである。ところが、更に明らかにされてくるのは教会の贅沢な実態である。そもそも政府が教会領を没収したのも教会が貴重な芸術品と、納税免除という長年の恩寵によって潤っていたからである。聖職者が支配してきたイタリアの財政に政府が関与したことで、“In Venice, to-day, a city of a

hundred thousand inhabitants, there are twelve hundred priests. Heaven only knows how many there were before the Parliament reduced their numbers” とか、“Under the old regime [the great Jesuit Church] required sixty priests to engineer it — the Government does it with five, now, and the others are discharged from service” (257) と「わたし」が言っているように多くの無駄が削減されている。しかし「わたし」は教会領没収が実質、国にとってよいことであったと力説するあまり、イタリアの抱える矛盾を次から次に暴露する。例えば、豪華絢爛たる建築物と貧困が混在する町の実態は次のように言い表されている。

She [Italy] is to-day one vast museum of magnificence and misery. All the churches in an ordinary American city put together could hardly buy the jeweled frippery in one of her hundred cathedrals. And for every beggar in America, Italy can show a hundred — and rags and vermin to match. It is the wretchedest, princeliest land on earth. (258)

「わたし」が的確にイタリアの実態を暴露してみせるこの文章は、旧世界に対する痛烈な社会批判となっている。しかし、彼は、ただ、思ったことをありのままに述べているだけで、社会批判となったのはあくまで結果としてである。「わたし」は特別にイタリアの政府、聖職者と教会に焦点を当てて批判しようとしたのではない。その証拠に、教会の贅沢な調度品について話したすぐ後では、聖職者と教会の名誉を挽回するために慈善活動に生涯を捧げた修道士たちについて聞いた話を紹介している。それは、コレラのとくに命も顧みず病人の介護に奔走したドミニコ修道会の修道士たちの活動についてである。「わたし」は修道士たちの慈悲の心、純潔さや、利他の心 (the charity, the purity, the unselfishness, 261) を称えている。ところが、滑稽なことに、粗末な僧服を着て裸足でいるこの同じ教団の修道士たちが Quaker City 号に乗り合わせたとき、「わたし」や他の乗客は、彼らとともに船上で踊り騒いでいる。「わたし」は彼らとうまが合うのだが、ことばが通じな

い。そうかと言って、「わたし」は彼らが本当の修道士であるかどうか不審に思うこともない。つまり「わたし」は、楽しかった事実を語り優れていると思った話をそのまま語っている。このように「イノセント」な視点で旧世界を見てまわる「わたし」は、あるときは、鋭い観察力を働かせ、あるときは、印象に任せて自由気ままな語りをする。

興味深いことに、「わたし」は「イノセント」であることに二種類あることを指摘している。まず Quaker City 号の観光旅行団は「イノセント」であるがゆえに、彼らの許容範囲を超えた事態に出くわすと当惑して混乱する。その一方で「わたし」のように「イノセント」な視点によって、物事の既成概念を崩していく旅行者たちが存在する。この二種類の人びとを、「わたし」は、それぞれ、前者は、聖地をたどって旅することに無上の喜びを見出す“Pilgrims”と呼び、後者は“Pilgrims”をからかい遊ぶことが好きで信仰心に欠けた“Sinners”と呼んでいる。両者それぞれが己について認識している特徴はその通りである。しかし、実際の“Pilgrims”と“Sinners”の言動から考えると彼らの立場は逆転する。つまり、“Pilgrims”は、旅の行程を完遂させたいあまり信仰心という名の下に不道德なことを平然とやってのけ、“Sinners”は、様々な矛盾や初めてのことにしづかぬからと言って、その対象に自らの基準を無理やり押し付けることはない。例えば、聖地バールベックからダマスカスへ馬で向かう“Pilgrims”は、安息日を守らねばならないからという理由で、旅の速度を緩めたくはない。そのため、毎夜、他者への愛について説く聖書を“Sinners”に読み聞かせているにも関わらず、昼間はその慈悲の心を疲れきって倒れそうになっている馬には注がない(452)。また、聖書でなじみのある憧れの地にたどりつくと、事実そこは貧困と腐敗の場所であることがしばしばだ。“Pilgrims”は聖地と呼ばれる場所が抱える深刻な現実に気がつくこともなく、遺跡の壁をこわして記念のかけらを削りとり喜んでいるのだが、“Sinners”は、黙って静かにその光景を見つめている。

この“Pilgrims”と“Sinners”の対比について、ロバート・レーガンは、神に選ばれた者(Election)と神に見捨てられた者(Reprobation)との対比とい

う古くからずっと繰り返されてきたテーマをトウェインは逆さまにして表した (Elect 225) と言っている。そのとおり、作者は、“Pilgrims”と“Sinners”ということばが当然持つべき概念を語り手の「わたし」に破壊させることで、旧世界の実態だけではなく、それを観察する側の「イノセント」なアメリカ人の本質も、読者に見せようと試みた。さらにトウェインは、ETSの“Letter from Mark Twain”において、滑稽な Unreliable とありきたりのことばを並べ立て満足している語り手を、ただ笑い、からかっていたことから格段に進んで、観察の基準は何であるのか、何を基準にして賞賛し、非難し、笑うのかという「わたし」独自の個性を更に肉付けしていったと言えるだろう。もちろん、*The Innocents Abroad* は、トウェインの実際の経験が基になって書かれているので、「わたし」と作者の間にある境界線は突如なくなることもある。どこからどこまでが体験記であり、創作部分であるのかが曖昧なのだが、作品の“Preface”にも、“it has a purpose, which is, to suggest to the reader how *he* would be likely to see Europe and the East if he looked at them with his own eyes instead of the eyes of those who travelled in those countries before him”と書いているとおり、*The Innocents Abroad* は、語り手である「わたし」の旅行記であることは間違いない。したがって、作者が実際にそこを訪れていなくても「わたし」が見聞して「ありのままの状況」を記録していればよいのである。

さらに言えば、「わたし」の物事の見方が示されていればよいのであり、実際に眼にしたことを報告する必要はない。このことが顕著だと思われる例を挙げれば、ヴェネチアにやってきた「わたし」が昔から続く宗教的祝祭の一つを見ている時の描写が適当だろう。「わたし」が、“a grand fête in honor of some saint who had been instrumental in checking the cholera three hundred years ago, and all Venice was abroad on the water” (219) と言っているこのお祭りはレデントーレ教会の祝祭のことである。「わたし」はこの祝祭の様子を“a beautiful picture”だと言い、その幻想的な雰囲気をととうと描写する。

Here and there a strong red, green, or blue glare from a rocket that was struggling to get away, splendidly illuminated all the boats around it. Every gondola that swam by us, with its crescents and pyramids and circles of colored lamps hung aloft, and lighting up the faces of the young and the sweet-scented and lovely below, was a picture ; and the reflections of those lights, so long, so slender, so numberless, so many-colored and so distorted and wrinkled by the waves, was a picture likewise, and one that was enchantingly beautiful. (219)

しかし、その規模については、1861年から1865年に駐ヴェネチア領事を勤めていたハウエルズによると、「レデントーレの祝祭はかつてのようなお祭り騒ぎでは全くなくなった」と言っている。ハウエルズの言う“the old-time gayety”は次のように描かれる。

The Venetians thronged the gardens, and feasted, sang, danced, and flirted the night away, and at dawn went in their fleets of many-lanterned boats, covering the lagoon with fairy light, to behold the sunrise on the Adriatic Sea. (Howells 275)

ハウエルズの祝祭の描写から連想されるのは先に引用した「わたし」が「一幅の絵」のようだと思った祝祭の様子である。たしかに、ハウエルズの駐在中でもレデントーレの祝祭の日には、ボートで運河はいっぱいになり、昼も夜も多くの人々でにぎわっている。また、教会の前でおいしそうな果物売る屋台の商人たちが大きな声をはりあげていたり、桑の実を売る商人が小鳥のさえずるようにぺらぺらとしゃべっていたり、何百という人々が行ったり来たりしているとも言っている。しかし、「わたし」の描写は、果物売りや商人たちの威勢よい掛け声よりむしろ上品に着飾った紳士淑女たちが魅惑的な光の下で楽しんでいる幻想的な雰囲気にとらえられている。*The Innocents Abroad* の前年に出版されたハウエルズの著作をトウエインが読んでいなかったとしても、「わたし」はレデントーレの祝祭を見て過去にそうであったろう幻想的な光景の印象を受けたのだ。これは「わたし」が実際に

祝祭を見たかどうかは問題ではなく、武藤氏がトウェインは紙面上でパノラマ興行を再現した(48)と言及するように、「わたし」の印象を描写していることが重要となってくる。

つまり、“Preface”で「わたし」が「公平な眼で物事を見て書いた」と注釈しているのは、ガイドブックで得た知識であろうと現実に体験した出来事であろうと、よいものはよい、面白い事は面白いと感じる「わたし」自身のものの見方、考え方が、*The Innocents Abroad*では示されていたことが明らかとなる。そして、さらに複雑なのは、「わたし」の素直な物の見方は、素直であるゆえに統一性に欠けていることである。ヴェネチアの絵のように美しい祝祭の様子は、その前に、散々にゴンドラの古びた車体を霊柩車と呼び、ゴンドラこぎにいたっては、“a mangy, barefooted guttersnipe with a portion of his raiment on exhibition which should have been sacred from public scrutiny” (218)と呼んでいるすぐ後に続くので、読者は「わたし」が本心から“a beautiful picture”と言っているのかどうか判断しかねるかもしれない。あるいは、“Letter from Mark Twain”で見てきたように、トウェインはうっとりするような光景に心奪われそれをセンチメンタルに表現することはしないので、「わたし」の誇張した描写を作者が離れたところからにやりと笑って見ていると言うこともできる。このことから考えても、「わたし」の「イノセント」な視点でとらえた感想は細部にこだわることなく自由に語られている。

最後に、「わたし」が新・旧両世界の人間、事物を観察するとき、何を基準として賞賛し、非難、あざけりやからかいの笑いを向けたのかについて確認しておく。19世紀は、旧世界のみならず外国旅行に関する作品が数多く出回っていた時期である³。その中において、「わたし」が試みたことは、両国の文化やその土地の人々の比較やセンチメンタルな感想、悪徳に対する糾弾ではない。レスリー・フィードラーは、「わたし」が、皮肉を言いたい衝動に駆られるものは、アメリカ人のうぬぼれ、アメリカ人の文化向上を目指す

哀れな試みであると言う。(American 51) それは、教養がないと思われたくないばかりに通じないフランス語を駆使して結局恥をかいたり (94)、飲料水がわりにワインを飲む国で、“I am a free-born sovereign, sir, an American, sir, and I want every body to know it!” (100) と横柄な態度でウェイターにワインを注文するアメリカ人旅行者の姿を描くことで示される。先にも言及したとおり、旅行者たちは、「イノセント」な視点を持っているけれど、「わたし」とは違い、見知らぬ異文化に出くわすと、それを受け入れることができず動揺してしまう。例えば、Quaker City 号で行く遊覧の旅が始まったばかりのところで、船客の一人であるブルーチャー氏は自分の愛用の時計が「船時間」に合わせられないでいることで気をもんでいる。ドン・フローレンスは、この出来事が、これから「わたし」にふりかかる矛盾の数々を暗示していると言っているが (67)、「わたし」は既成概念を破壊することはしてもブルーチャー氏のように困惑することはないのである。

「わたし」は、こうした愚かな同胞にむしろ温かい眼を向け、彼らが内に抱える卑俗さ、あさましさ、度量の狭ささえも受け止め認識する。そして、「人間なんてこんなものだ」と言うかのように明るく持ち前の冗談で笑いとばすのである。もちろん「わたし」自身も、旅の始まりから最後まで、率先してその醜態をさらけ出す事態に陥っている。例えばタンジールでは女性店員におだてられて破れた手袋を買うはめになり (74)、帰国後にニューヨーク『ヘラルド』(New York Herald) へ寄稿した告別の辞では、でたらめなフランス語で話したこちらの落ち度であるにも関わらず、「生粋のフランス人」がこちらの言うフランス語を理解できないでいる (645)、とまじめに話していたりする。しかし、そうしたばかげた部分も全て併せ持つ人間らしい「わたし」であるからこそ、「先人の眼を借りることなく」素直な視点で外国旅行記を完成することができたと言えるだろう。このように、「わたし」は *ETS* のスケッチで作者から独立した人物として出発し、*The Innocents Abroad* では、「イノセント」な視点をフルに活用させて、物事の既成概念を破壊した。この「わたし」は、トウェインの作家としての独り立ちが期待できる登場人物

の原点として注目に値するのだ。

注

- 1 時には、トウェインと実生活でも仲のよかった A.Reeves Jackson が、「ドクター」と呼ばれて「わたし」の代弁をしている場合もある。例えば、27章で、ガイドをからかうために、コロンブスの像を指して真剣な顔で “Is he dead?” と質問しているのは、「ドクター」である。
- 2 イタリア美術の保存修復が本格的にはじまったのは18世紀末である。“The Last Supper” は、最も破損が激しい絵画としても知られている。16世紀から19世紀にかけて、複数回の修復、剥離部分の書き足しなどが行われたが、修復者のレベルにばらつきがあり良い結果を生んでいない。したがってトウェインが見た “The Last Supper” は「わたし」の言うとおりにまだ薄汚れて絵の細部までは見えなかった可能性が十分にある。
- 3 19世紀を代表する旅行記作家 Bayard Taylor や「わたし」が William C. Grimes と表記してその著作を引用した William C. Prime は旧世界をセンチメンタルな視点で描写する。また、Artemus WardやHowells のように滞在経験を正確に綴る作家もいた。トウェインは、Artemus Wardの *Artemus Ward in London* (1867) からジョークの借用をしたりと、作品を書くにあたりウォードから大きな影響を受けている。

引証文献：

- Florence, Don. *Persona and Humor in Mark Twain's Early Writings*. Missouri : University of Missouri Press, 1995.
- Fiedler, Leslie A. “An American Abroad.” Ed. Stuart Hutchinson. *Mark Twain Critical Assessments*. Mountfield, East Sussex : Helm, 1993.
- Howells, William Dean. *Venetian Life*. New and Enlarged Edition. Boston : Houghton, Mifflin and Company, 1867.
- Regan, Robert. “The Probate Elect in *The Innocents Abroad*.” *On Mark Twain*. Eds. Louis J. Budd and Edwin H. Cady. Durham : Duke University Press, 1987.
- Twain, Mark. *Early Tales & Sketches*, Vol. 1. Berkeley : University of California Press, 1979.
- . *The Innocents Abroad*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. Oxford : Oxford University Press, 1996.
- . *Mark Twain's Letters*, Vol. 2. Eds. Harriet Elinor Smith and Richard Bucci. Berkeley : University of California Press, 1990.
- 武藤脩二. 「マーク・トウェインのヴェニス」『マーク・トウェイン研究と批評』第四号 (2005). 東京 : 南雲堂.